

東京分室 PD 個人研究

中国仏教における不退転の  
概念内容の解明

研究代表者・東京分室 PD 研究員 澤崎 瑞央  
(仏教学)

本研究は、大乘仏教において仏と成る道程から退くことがない段階と考えられる「不退転」を主な研究対象としている。とりわけそのような段階が求められた思想背景と、いかなる思想的根拠によって「不退転」の概念が構築されているかを主な問いとして、その概念内容の解明を目的としている。

仏教における理想的人間像といえば「ブッダ」その人を指すが、大乘経典ではそのような「ブッダ=仏」に成ることが確定した行者を「正定聚」や「不退転」という修道的段階を表す語句で示してきた。特に「般若経典」では、仏に成ろうと志す者を「菩薩」と呼び、さらに、『大智度論』では本当の菩薩とは不退転の菩薩であると明示している。このことから、「不退転」とは、大乘仏教徒が目指す仏への道程において、初めに目標に掲げられる段階であり、ある種の目指すべき理想的人間像を示していると考えられる。この「不退転」の語は、多くの大乘経典に用いられており、特に浄土経典においては、極楽浄土への往生と緊密に関連して説かれている。

しかし、なぜこのような段階が求められたのか、また、どのような思想的根拠の基に二度と仏と成る道程から退かないという理論が構築されているのかについては研究の余地を残している。その要因には、主にこの語句が総じて十分な説明がなされずに用いられることや、様々な教義概念と関連して示されることに加えて、一見すると現実には到達不可能な段階のようにおもわれることが挙げられる。さらには、初期経典から用いられてきた「正定聚」といかなる違いがあるのかという点にも注目される。そこで、本研究では、「般若経典」に関する最古の注釈書であり、東アジア仏教に多大な影響を与えた『大智度論』を主な対象として、「不退転」の概念内容を体系的に解明することを試みている。

これまでの研究では、見仏の三昧である「般舟三昧」、成仏の予言である「授記」、そして空の思想とも密接に関連し、法の無生という智慧を備える「無生法忍」などと不退転の思想的関係を考察してきた。これらの研究成果から、『大智度論』に示される不退転とは仏と成る過程から退くことがない思想的根拠として、「仏とは何か」、また「真の仏説とは何か」という

課題が解決された状態と仮定された。本当の仏および仏説とは何か、という仏教徒の根幹にかかわる問題の解決が、いかなる外的内的影響にも左右されなくなることに緊密に関連していると考えられるためである。

上記の仮定を基に、今年度の研究では、「神通力」と「往生」について検証考察し発表したことを報告する。今年度の発表題目は以下の三つ、①「菩薩の修道過程における神通力の位置づけ——『大智度論』に焦点を当てて——」、②「『大智度論』における往生と不退転」、そして③「『大智度論』「往生品」を読む」である。

まず①では、『大智度論』において、超人的な力と考えられる「神通力」を仏と成ることを志す仏教徒が備えることに、どのような意義を見出しているかに着目した。『大智度論』では、無仏の時代において、「ことば」という文化的状況に位相を移す力として仏の神通力が示されている。本報告で重視したのは、そのような仏の神通力と菩薩や仏教徒が身に着ける神通力の関係性である。結論として、菩薩に神通力が求められる要因は、衆生を対象とした神通力を用いた仏の教化方法（ことば）に起因していると解釈されていた。したがって、菩薩が仏と成るには、そのような神通力の獲得が不可欠となる。

②と③に関しては、「般若経典」では、最初期から「どのような死生観をもって修道過程を歩むべきか」という問題意識が表れていたことに着目し、往生と不退転の関係を検討考察した。ただ『大智度論』の場合、往生とは必ずしも阿弥陀仏の極楽浄土へ行き生まれることを意味しない。天や諸仏の仏国土に生まれ変わることに加えて、生まれ変わりそのものもまた往生として示されていることには注意が必要である。このような往生の用例を検証すると、『大智度論』では、仏法に触れそして仏弟子となった者は、実は皆な過去世において仏法に出会い、そして往生してきた者と解釈されていると考えられる。加えて、無仏の世においても仏法を聞き受持する者も同様に往生してきたも者とされている。このような用例の検証から、『大智度論』では、仏法に出会った者の生まれを「往生」とみなしていることが明らかになった。

①は『印度学仏教学研究』72巻1号に、②は第72回「仏教史学会」、③は「科学と仏教思想」研究会において発表し、論文掲載を予定している。